

05 新潟県三条市 高齢者の外出機会創出と多世代が交流する場づくり

What ▶ # 拠点づくり



左から株式会社 リトモ 代表取締役の熊倉 誠之助さん、三条市 市民部 地域経営課の三方 順子さん、NPO 法人 えんがわ 理事長の長野 源世さん。ステージえんがわにて。

お話を伺った方々

地域再生マネージャー

株式会社 シュチェンシュリーバ
代表取締役
こんどう
近藤 ナオさん

行政

三条市 市民部 地域経営課
みかた じゅんこ
三方 順子さん

民間

NPO 法人 えんがわ 理事長
ながの げんせい
長野 源世さん

株式会社 リトモ
(三条スパイス研究所運営) 代表取締役
くまくら せいのすけ
熊倉 誠之助さん

多世代がゆるやかに繋がる。人と地域を繋ぐハブ拠点

高齢者の健康増進を目的とした「スマートウエルネス三条」を推進してきた三条市。その中核施設としてオープンしたのが「ステージえんがわ」だ。地域のリーダーたちが高齢者の外出を促す「目指す場」としての取り組みを進め、賑わいを創出。現在では多世代が集う交流の場に成長し、人と人・地域と地域を繋ぐハブとしての役割を得て、その存在感を増している。

課題

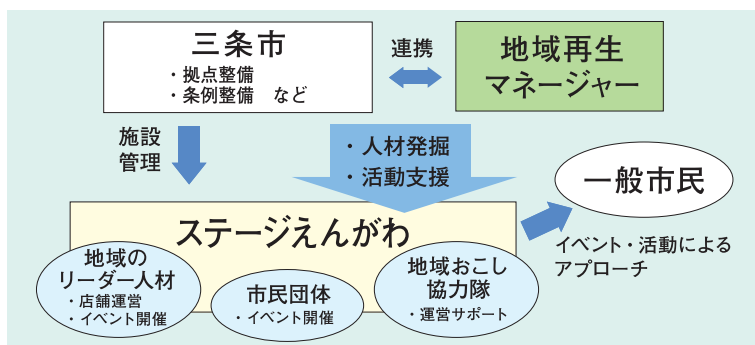
急速な人口減少と高齢化が進む中で、高齢者の健康維持は社会保障費の抑制や高齢者サービスの担い手不足などの観点から重要な課題となっている。しかし、健康寿命を延ばすことを目的に運動や生活改善に取り組む高齢者は全体の3割程度にとどまり、高齢者が意欲をもって社会参画できる場も十分ではなかった。

目的

中心市街地である旧三条小学校周辺の「まちなか」エリアに誕生した「まちなか交流広場」（名称：ステージえんがわ）は、三条市が当時推進していた高齢者の健康増進事業「スマートウエルネス三条」の中核施設に位置付けられていた。ハード面での整備が進んでいる中で、事業実施にあたっては、高齢者が外出する機会創出や地域住民主導の持続可能な運営体制構築などソフト面の整備を進めていくことを目的とした。

地域再生マネージャー事業 実施期間 (2015年度～2017年度)

事業実施体制



地域再生マネージャーとして近藤 ナオさんを招聘し、事業全体をマネジメント。市は「スマートウエルネス三条」構想を指針にハード整備を進めながら、地域人材発掘のサポートや条例整備などの後方支援を行った。また、「100人インタビュー」にてリーダー人材を発掘後は、近藤さんが適宜アドバイスを行いながら、それぞれが事業化に向けて取り組みを進めていった。

事業実施内容

●「まちなか交流広場」(ステージえんがわ) オープンに向けた整備

What — 何をしたのか?

ハード面での設計と、飲食店で「スパイスカレー」を提供するというアイデアはすでに決まっており、それらをどのような形で運営していくのか方向性を検討した。

How — どのようにしたのか?

●ターゲットを意識したハード面の調整

地域再生マネージャーのアドバイスのもと、ターゲットである高齢者が集いやすいような内装や空間づくりを進めた。

●飲食事業の構築

飲食事業を展開することはすでに決まっており、日本におけるスパイス料理の先駆者「SPICE café」の伊藤シェフのプロデュースのもと、メニュー開発を進めた。

「当時はまだスパイス料理がメジャーではなく、何かシンボリックなここでしか食べられないものを作って人の流れを生み出したという思いがありました」(三方さん)

また、地域資源の整理を行う中で、スパイス料理のメイン素材であるウコンが三条市内でも栽培されていることがわかり、ストーリーが繋がった。

●地域で取り組みを牽引する人材を発掘

What — 何をしたのか?

事業終了後の自走を目指すには、地域で動く人材の発掘と育成を行う必要があった。

How — どのようにしたのか?

●100人インタビューで地域のリーダー人材を発掘

地域再生マネージャーが中心となり、取り組みを牽引する人材を発掘すべく面談を実施。市長や議員、不動産業者など地域を俯瞰して見ている人材からスタートし、地域のキーパーソンとしてすでに何らかの活動を行っている人や、面白い発信をしている人などにも対象を広げていった。

●人が集まる仕掛けづくり

What — 何をしたのか?

地域再生マネージャーと発掘したリーダー人材、地域おこし協力隊が中心となり、高齢者への意識調査をもとにした「欲求を刺激する取り組み」を走らせながら、「ステージえんがわ」でもイベントを充実させ、賑わいと交流を生み出した。

How — どのようにしたのか?

●意識調査で高齢者の「欲求」を探る

「健康」というキーワードだけで高齢者の外出を促すことは難しい。そのため、高齢者がそもそもどのような「欲求」を持っているのかを対面でヒアリングし、それらを刺激する施策を打ち出すことで「ステージえんがわ」に来てもらう動機づくりを行うこととなった。調査の結果は男女間でも差があり、女性では「食欲」や「奉仕欲」が上位に。男性では「物欲」や「金銭・ビジネス」に関する欲求、「異性との交流」などが上位に入り、これをもとに、「お金をかけないギャンブル」や「大人のための演劇教室」などの取り組みを試験的に開催していった。

●“ヒト”“モノ”を繋げて“コト”を作り、高齢者が訪れやすい“バ”に

「ステージえんがわ」は2016年3月にオープンし、さまざまなイベントを打ち出していたが、コンセプトの新しさやデザイン性の高さなどから高齢者が敷居を跨ぎにくいという課題に直面していた。また「三条スパイス研究所」も同様に、スパイス料理に馴染みの薄い高齢者にいかに訪れてもらうかに頭を悩ませていた。

『三条スパイス研究所』と一緒に集客のための趣向を凝らしてみたものの、それ以前に高齢者が敷居を跨ぎづらいという課題に対し効果的な施策を打ち出せずにいました。その中で、自分たちは三条市のことを知っているつもりになっているけれど、実は知らないことがたくさんあるのではないかと考え、まずはまちの歴史や文化を改めて体系的にノートに書き出してみることにしたんです。

すると、必然的に地域の高齢者の方に話を聞きにいかねばならない場面が出てくる。そのうちに『そば打ちができるよ』『笹団子の作り方なら教えられるよ』という方々と知り合えたので、それでは彼らをプレイヤーに見立てて『えんがわ』を使ってもらおう、と思いついたのが、打開に繋がった最初の一步。その後、今度は『要らないタンスがあるから処分したい』とか『庭に笹が増えすぎて困っている』という相談を持ちかけられるようになり、それなら『タンスを解体してワークショップをしよう』とか、『笹を切って七夕飾りを作ろう』とアイデアが広がっていき、人の繋がりとともに『やれること』『集まる人』も一気に拡大していきました。目新しいものよりも三条市らしい土着のものをかき集めて、それをヒトやモノと繋げていくことが大切だったんですね（長野さん）

『三条スパイス研究所』でもスパイスのワークショップを開催してみたりと地道な仕掛けは続けつつ、もっとも人が集まるきっかけとなったのは、近くで長らく行われてきた朝市に合わせて朝食を始めたことです。そのときだけおにぎりや味噌汁などの和食を提供したのですが、これで高齢者の方々が店に入ってきてくれるようになり、そこからスパイス料理に興味をもった方が少しずつ通常営業の時間にも来てくれるようになりました。『ピリヤニって知ってるか?』と友人を連れてきて得意げに話すおじいちゃんなんかも出てきて、こうやって受け入れられていくのだな、と変化を目の当たりにしました（熊倉さん）

主な成果

●リーダー人材の発掘

「100人インタビュー」ではリーダー人材18人を発掘。中でも下記2人は運営を中心に担う人物として重要な位置付けにある。

1人目は「ステージえんがわ」の運営を担う長野 源世さん。広告代理店出身の豊富な実績を持つ人材で、地元に戻り家業を継いでいたが、経営の経験やプロデュース力など基礎能力の高さと深い地元愛を買われてNPO法人えんがわの代表となった。

「三条スパイス研究所」を運営する熊倉 誠之助さんは、岩室温泉で古民家を再生したレストランを経営しており、ここが2店舗目となる。

「岩室温泉は寂れた温泉地ですが、飲食店が持つ人を呼び込む力や街への影響力を日々感じていて、出店をするならまちなかより地域に入りたいという思いをもっています。この場所の話聞いたときに『地域のための飲食店』というビジョンが見え、自分の考え方も合っていたので、ぜひやってみたくて手を挙げました。公共の飲食店は初めてだったのでいろいろな方と意見を交換しましたが、近藤さんが丁寧にマネジメントしてくださったので、うまく形にすることができたと思います」（熊倉さん）

●外出機会の創出と市民活動の活発化

「ステージえんがわ」オープン前から多くの事業が立ち上がり、活動を開始。オープン後は同施設を拠点に動いていった。代表的なものとしては、毎回50人ほどの参加者を集めた「うたごえ喫茶」や、新潟市内での大規模公演も叶えた「65歳以上の劇団」、お金を賭けずに楽しむ「健康ギャンブル」などがある。「ステージえんがわ」のイベントも初年度から年間250回程度開催。2年目以降もほぼ毎日のように、なにかしらのイベントが行われている。

地域再生マネージャーコメント

株式会社 シュチェンシュリーバ
代表取締役 近藤 ナオさん

6 地域のキーパーソンを 探り当てるのが 自走に繋がる



PROFILE

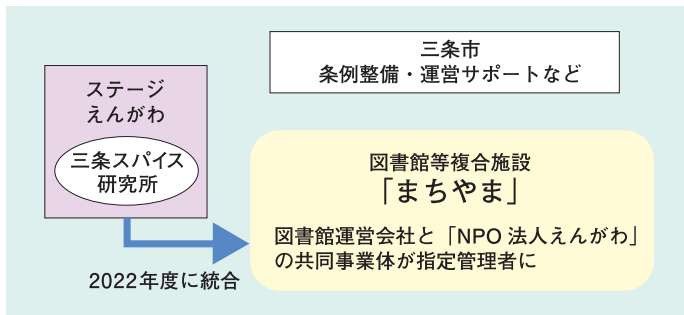
「シブヤ大学」や「宮下パーク」などの地域活性化プロジェクトに参画し、人と人が繋がる場づくりや実験的な取り組みを多数手掛ける。多拠点生活を先駆けて実践し、「拡張家族」を掲げて新築マンションの1フロア19部屋を39世帯でシェアするなど独自のコミュニティ活動を展開。誰もが釈然と生きられる社会を目指す。

三条市ではそれまで「スマートウエルネス」を推進する際に「もっと健康になりましょう」と発信をしてきました。しかし人はマイナスをゼロに戻したいとは思えませんが、そこまでの状態にない人に対しては他の欲求を刺激した方が外出に繋がるのではないかと。そんな仮説を立てて行ったヒアリングでは、食欲や物欲などが上位を占め、思ったとおり健康欲はそれほど高くありませんでした。その結果を参考に欲求を刺激する施策を打ち出したのが、この取り組みの最初の重要な部分です。それと並行して地域の人100人と1対1で面談する「100人インタビュー」を実施し、地域に根付いて事業を行うリーダー人材を見つけていきました。

地域のキーパーソンを探り当てることができれば、あとは足りない部分を少し支援してあげるだけで自走するようになります。僕の理想は2年半くらいで「そういえばナオさん最近見ないね」と存在を忘れてもらえるような状態にもっていくこと。三条市の場合も2年後にはすでに自走している取り組みが複数あり、しっかりと手離れしてくれましたね。

地域再生マネージャー事業 終了後の取り組み (2018年度以降)

事業実施体制



「NPO法人えんがわ」と「三条スパイス研究所」の2事業者が市と連携を取りながら施設を運営。「ステージえんがわ」は2022年7月オープン of 図書館等複合施設「まちやま」に統合され、市直営施設から指定管理施設に移行し、「NPO法人えんがわ」を含む共同事業体が指定管理者となった。

事業実施内容

● 周辺施設と連携した事業継続

What — 何をしたのか？

「ステージえんがわ」を核に引き続き取り組みを進めながら、エリア全体の活性化に繋げていく。

How — どのようにしたのか？

● 図書館等複合施設「まちやま」との統合

2022年7月、旧三条小学校跡地に図書館をメインとした複合施設「まちやま」がオープンし、「ステージえんがわ」もその一部となった。NPO法人えんがわは同施設の指定管理者として関わりをもち、「三条スパイス研究所」も引き続き同施設で営業を続けている。「これまでまちづくり会社としてやってきたノウハウを形を変えて生かしつつ、全国にネットワークを持つ図書館運営会社から得られる情報もあるので、とても良い効果が生まれています。図書館等複合施設は多世代が集まる場所ですから、まちづくりとも非常に相性が良いですね」(長野さん)

主な成果

● 賑わい創出の継続

2021年度までは「ステージえんがわ」を核に、年間6.6万人の賑わいを創出。2022年度以降は「まちやま」「ステージえんがわ」合わせて年間430回程度のイベントを開催しており、「まちやま」の来館者数は2022年度(オープンからの8カ月間)で49万7,111人、2023年度58万2,719人、2024年度52万9,802人となり、2025年12月には累計200万人を達成した。「無理だと思われるアイデアも多いのですが、地域や市の方々がとても協力的で、なんだかんだ実現しています。ここで気球を上げて自分たちのまちを空から見よう、なんてこともやりました。最近では市内に眠っていた日本に4台しか現存しない“エラールピアノ”を発掘し、地元企業の方々の協力を得て復元することができました。国内では赤坂迎賓館とここにしか演奏可能なエラールピアノがないため世界中からお話が来ていますが、三条の文化活動推進の一歩として地域住民の活用を優先していますね。“ピアノで何か一曲弾けるようになったら使ってください”と条件を設け、週末の図書館開館時の『オープニングベル』としてたくさんの方々に演奏をしていただいています。今では全国から応募が殺到し、来館者に潤いを与えています。三条市は工業や産業が大きいまちですが、文化芸能の面も大きくしていきたいなと考えているので、この『まちやま』を拠点に発信していけたらと考えています」(長野さん)

● 人の流れの拡大

「三条スパイス研究所」が「ミシュランガイド新潟2020」に選出されたことをきっかけに施設の注目度は高まっており、外部からの人の流れを生んでいる。隣接する鍛冶技術の体験施設「三条鍛冶道場」をはじめ、周辺の工場を訪れる人々のランチスポットとしても人気で、エリアの回遊を促す拠点としても期待値が高い。その他の波及効果として、周辺には雑貨屋や飲食店などが新たに開業。「まちやま」でのイベント参加がきっかけとなった例もあるようだ。「今後は空き家活用なども視野に入れた取り組みも必要となってくると思っています」(三方さん)



(左)「三条スパイス研究所」の店内。(右)「ステージえんがわ」の入り口には、廃材を使った札がかけられ、開催されるイベントがひと目でわかるようになっている。

●多世代が交流する場に

当初は高齢者をターゲットとして設計された場であったが、さまざまな取り組みに挑戦していった結果、多世代が集う場となった。「イベントを頻繁に行っていたこともあり、まずは子育て世代の利用が増え、そこから子どもたちがおじいちゃん・おばあちゃんと一緒に来るようになり、最近、やっと学生たちが来るようになり、これまで交流がなかった世代同士に自然と交流が生まれています。最初は学生たちがおじいちゃん・おばあちゃんにマナーを注意されたり怒られたり、というところから始まることも多いようですが、いつの間にか自然に会話が生まれていて、おじいちゃんが物を落としたら高校生がスッと拾ってあげる。そんな場面もよく見かけるようになりました。何気ないけれど、何か起きていてのを感じますね」(長野さん)

「一般的な経営の視点で見れば、何も注文せずずっと居座っている学生がいるというのは考えられないことです。でも、ここは地域の開かれた場として、それらを『良し』とすることが店としての価値でもある。まちなかの飲食店とはまったくの別業種だと認識し、地域への理解をしっかりと上で運営していかないといけないと学びました。ちなみに最近雇った大学生のアルバイトの子がいるのですが、彼女は高校生の頃にここで勉強していたそうです。同じ場所で10年ほど続けていると、こんな風に人生が変化するタイミングで再び関わりができることもある。もともとそういうビジョンをもって取り組んできたので、とてもうれしいですね」(熊倉さん)



(左上)「まちやま」で行われた学生による演奏会。日本に4台しかないエラールピアノの音色をバックに、みずみずしい歌声が響いた。

(右上)「三条スパイス研究所」には、学生から高齢者まで幅広い人が集う。

(下)店内飲食だけでなく、スパイスを使ったさまざまな商品を開発。県内企業とコラボしたカレー味せんべいや、三条産の素材を使用した「ピリヤニキッ」が人気。



ステージえんがわ



自治体コメント

三条市 市民部 地域経営課 三方 順子さん

新たな地域人材との出会いが宝となった

事業を申請するにあたり、もっとも期待したのは新たな人との出会いです。「人の交流を生む」という取り組みの中で、行政のまわりにいる方々だけではなく、もっとその先にいる良いプレイヤーの方々と一緒につくってきたい。結果として、長野さんと熊倉さんという信頼できるプレイヤーの方を発掘し、その他にもたくさんの方に関わっていただけたことは本当に素晴らしいことですし、それをまとめることができたのは、近藤さんのプロジェクトマネジメントのおかげだと思います。



取り組みのプロセス

事業の方向性

行政での取り組み

地域での取り組み

成果

成果に繋がった
ポイント

マネージャー事業実施期間中

1年目(2015年度)

「スマートウェルネス三条」の核となる「まちなか交流広場」(ステージえんがわ)を拠点としてオープンに向けて、ハード整備と並行しソフト面の整備を進めた。

「スマートウェルネス三条」構想に基づいて「ステージえんがわ」のハード面での整備を進めながら、行政面での基盤づくり・サポートを行った。

地域再生マネージャーによる「100人インタビュー」で発掘されたリーダー人材が、事業化に向けた準備を進めた。

- 事業を担うリーダー人材を発掘した。
- 高齢者への意識調査でニーズを把握した。
- 市民団体やサークルとの繋がりづくりができた。
- 「三条スパイス研究所」のメニューを開発した。
- 「うたごえ喫茶」「65歳以上の劇団」などの事業をスタートした。

- 「100人インタビュー」で地域の人材を幅広く掘り起こした。
- インタビューから地域の人の本音やまちづくりに対する意識、すでに起きている小さな動きなどを把握することができた。
- 高齢者への意識調査を行い、欲求を刺激する取り組みを行った。

2年目(2016年度) ←

2016年3月にオープンした「ステージえんがわ」を拠点として、賑わいや人の交流を生み出す施策を実施し、それぞれが自走を目標に取り組んだ。

地域のリーダー人材とともに「ステージえんがわ」を運営。取り組みが円滑に進むよう、規制等の制度面などからもバックアップを行った。また、運営組織の法人化に向けた基盤づくりを行った。

リーダー人材が事業を主導し、「ステージえんがわ」とその周辺に賑わいをつくるための企画を次々と動かした。また、事業終了後の自走に向けて運営組織を法人化する準備を進めた。

- 年間250程度のイベントを開催。「小さな花火大会」は2日間で700人を集めた。
- 「三条スパイス研究所」「うたごえ喫茶」の黒字化に成功。
- 「ステージえんがわ」の取り組みが「グッドデザイン賞2016」を受賞した。

- 地域らしさを大切に「ヒト」「モノ」を繋げた「コト」づくりで、高齢者でも親しめる「バ」を育て上げた。
- 高齢者をプレイヤーとして巻き込んだり、「三条スパイス研究所」で朝市に合わせて朝食を提供するなど、来訪のきっかけづくりに向けて試行錯誤を重ねた。
- メインである高齢者を意識しつつ、多世代が交流できる取り組みを進めていった。

3年目(2017年度) ←

引き続き「ステージえんがわ」を核とした賑わいづくりを継続。同時に事業終了後を見据えて自走化を進めた。

引き続き事業者たちと情報共有し合える関係性を維持し、必要に応じてイベント運営や条例整備などのサポートを行った。

「ステージえんがわ」の運営組織を構築。NPO法人えんがわが中心となり、各種イベントを実施した。飲食事業においては三条市の魅力発信に繋がる地域の食材を使ったメニュー開発に取り組んだ。

- 「ステージえんがわ」と周辺施設で230回程度のイベントを開催。運営組織として「NPO法人えんがわ」を設立した。
- 三条産ウコンを使用した新商品が完成。伊勢丹新宿店でのPR販売も行った。
- 「三条鍛冶道場」をはじめ、地域の団体・施設と連携したイベントを開催した。

- 多世代交流を意識した幅広い取り組みにより、安定して人が訪れる環境が生まれ、本来のターゲットである高齢者の外出促進にも繋がった。
- 飲食事業においてはブランディングを意識し、コンセプトに基づいた商品開発を進めていった。

4年目(2018年度)以降 ←

マネージャー事業終了後

2021年度までは引き続き「ステージえんがわ」を拠点に賑わいづくりを継続。2022年度以降は隣接する旧三条小学校跡地にオープンした図書館等複合施設「まちやま」の施設として再スタートを切り、周辺エリアを巻き込みながら賑わいと人の流れを生む拠点として取り組みを続けている。

各事業者と連携しながら、賑わい創出に関わる取り組みを支援。「ステージえんがわ」が「まちやま」に統合後は市直営施設から指定管理に移行。指定管理者としてNPO法人えんがわを含む共同事業体に運営を委任し、適宜サポートを行っている。

「NPO法人えんがわ」と「三条スパイス研究所」が中心となって取り組みを進め、市内の事業者とも連携しながら賑わいづくりの施策を拡大。「まちやま」オープン後はNPO法人えんがわが指定管理者の一員となり、取り組みを牽引している。

- 年間430回程度のイベントを開催し、人が集う場に。多世代が交流する地域のハブの役割を確立。
- 「三条スパイス研究所」が「ミシュランガイド新潟2020」に選出された。
- 地元企業と連携した取り組みを広く展開。「まちやま道具箱」「エラールピアノの復元」などは市内外から広く注目を集めている。
- 周辺地域への新規出店が増加傾向にある。

- 事業実施期間中から蓄積したアイデアやノウハウに加え、外部からの人の交流が増えたことで「できること」「やれること」の幅が拡大。
- 図書館等複合施設ができたことで、より多世代が集まる場になった。
- 「まちやま」周辺を広く使ったイベントを打ち、人の流れを生み出している。

2024年度までの実績 ←

「まちやま」オープン後の来館者数は、2022年度(7月オープンからの8カ月)は49万7,111人、2023年度は58万2,719人、2024年度は52万9,802人。「ステージえんがわ」「まちやま」それぞれで周年祭を毎年開催しており、「ステージえんがわ」は毎年200人程度、「まちやま」は毎年2万人程度を集めている。その他、三条市の花火大会と同時開催される「まちやまつり」や地域の企業と協力して開催する夜の芸能祭「まちやま薪能」、開館時に一般の希望者が演奏を行う「エラールオープニングベル」、ものづくりのまちのアイデンティティを継承する「まちやま道具箱ワークショップ」など多彩なイベントを継続して開催している。